この手紙は、前回のものから二週間たった七月二十七日付の手紙です。つまり、実践を始めてから三週間の指導の結果が、報告されたものです。

この報告の中で、大変にいけないことをやってしまったことが報告されています。お父さんはまだそれに気づいていませんが、“馬”を“うま”と言わせようとこだわっていることです。

漢字は“目で見る言葉”です。だから、“耳で聞く言葉”と一緒に教えるのが良いのです。ところが、愛子ちゃんはすでに“おうま”という発音で、“耳で聞く言葉”を身につけていました。しかも、愛子ちゃんにとっては、馬は“おうま”というものであって、“お馬”という意識はないのです。

こういう場合は、“馬”は“おうま”でも結構なのです。もしも、それでは気がすまないというのなら、カードの方を“お馬”と改めるべきです。いずれにしても、“うま”と言わせようと固執することは間違いです。もっと幼い子でしたら、“犬”は“ワンワン”猫は“ニャンニャン”でも良いのです。

一体、漢字を読むということは、その字の意味することを理解することであって、単に発音するだけのことではありません。発音できても、意味がわからなかったら、何にもならないのです。

だから、漢字の教育では、その字の意味内容の理解を重視して、例えば“馬”という字だったら、本当の生きた馬を見せた上で、これを教えることが大切なのです。この点では競馬場の厩舎まで出掛けて行ったお父さんの教え方は、良かったのですが……。

“実物（本当の馬）”“言葉（うま）”“漢字（馬）”この三つを頭の中で結合させることが、石井式漢字教育では特に重視することにしていて、私の著者では、このことがいつも強調されています。しかし、実物を体験させることが大切だとは言うものの、これにはなかなか努力のいることで、愛子ちゃんのお父さんの努力には心を打たれました。

もう一度、“おうま”の問題に戻りますが、漢字の読み（発音）とは“言葉”のことですから、現在子供の使っている言葉以上のものを要求してはいけません。例えば、幼児にはサ行の発音がむずかしくて、これを夕行で発音します。だから、汽車は“キシャ”と言えなくて“キチャ”になります。

この場合、「キチャではなくてキシャだよ。さ、キシャと言ってごらん」と子供に要求してもだめです。このような発音上の問題は、ほうっておいても発音能力が向上すれば、自然に改まりますから、直そうと思わないで、時期を待った方が良いのです。

ただ、子供がキチャと言うのに合わせて、大人がよくキチャという言い方をしますが、これではいつまでたってもキシャになりません。子供の発音を直す必要はありませんが、大人はいつも正しい発音をするように、心がけなければなりません。

例えば、子供が“汽車”をキチャと読んだら、「そう、この字はキシャだね。よく読めたね」と言って、これを認める一方で、正しい発音を聞かせることが大切です。だから、“馬”をオウマと言ったら、「そう、この字はウマという字だね。よく読めたね」と言っていれば良いのです。そのうちに必ずひとりでに直ります。

将棋の話が出ていますが、これは愛子ちゃんの家を初めて訪問した時、手先、特に指先を使う仕事や遊びの大切さを奨めたことがありましたが、将棋はその一つだったのです。

ます目に一つずつきちんと並べること。並べた将棋を人指し指を使って立てること。また、振り将棋といって、金将四枚を振り投げて遊ぶ遊び方など、楽しく遊べて、その間に指の働きを巧みに、かつ敏感にさせることをねらった遊びを教えてやりました。

頭の働きは、頭を使うことによって活発になるものですから、頭を使わせるように仕向けることが大切であることは勿論ですが、何と言っても身体が丈夫でないことには、頭を使おうという意欲が生まれません。そこで、頭を使わせること以上に、まず身体を丈夫にすることの重要性を説きました。プールでの水遊びの報告は、そういうことでなされているのです。

便りの最後に『感情の面の発達してきていることに気づきます』と書かれてあります。この点に御注意頂きたいと思います。幼児が漢字を覚えますと、急に幼児が人間らしくなることをこの教育に従っている方は、どなたも指摘します。

知性と感情（情操）とは別個に独立して発達していくものではなくて、互いに関係し合い、影響し合って発達していくものでしょう。そして、知性も感情も、言葉によって豊かになり、発達するものですから、漢字教育が知性を育てるばかりでなく、感情を豊かにするのは当然のことなのです。

よく、「幼児期は情緒を豊かにする時期だから、漢字のような知育は控えるべきだ」という意見を聞きますが、そういう意見はこの事実から考えてみて、誤っていることがよくおわかり頂けると思います。